第 122 号　2019 年 1 月 31 日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く――いつも　ともに

仙台教区サポートセンター　センター長　　**平賀　徹夫　司教**

2019 年という新しい年、恵みの年を迎えました。皆さま、あけましておめでとうございます。

私は、「年頭書簡」に「新しい恵みの年　2019 年を迎えて」と書きました。歩み出した 2019 年が、東日本大震災と福島原発事故のすべての被災者の皆さまと、それに関わるすべての人の上に、いつくしみそのものでいらっしゃる神様が、豊かな恵みを注いでくださる年でありますようにと願い、祈っているからです。

昨年の世相を表す漢字は「災」だということでした。確かに、北陸地方の豪雪に始まり、猛暑、西日本豪雨、台風、北海道胆振東部地震と続きました。

今年は穏やかな新年を迎えることができるように、と願い、祈っておりました。ところが、１月３日に熊本県和水町で震度７の地震が起こりました。聖パウロが「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と私たちに勧めていますが、この言葉が、ますます神様から呼びかけられていると、切実に感じています。

東日本大震災と福島原発事故の被災者の方々は、どんなに不安なお気持ちになられたことかと案じております。

東日本大震災から、８年を迎えようとしております。昨年も多くの方々に助けられました。ある方はボランティアとして被災地を訪ねてくださっています。この中で、初めて被災地でボランティアをしてくださった方々は、皆さま同じような感想を述べられます。「７年たっているし、東日本大震災のニュースも流れないので、すっかり復興していると安心していました。でも、まだ、全然復興していないのですね。知りませんでした。帰ったら、このことをぜひ伝えていきます。そして、またこちらに来ます」と。こうして、定期的にボランティア活動を続けてくださっている方もいらっしゃいます。ほんとうに、ありがたいことです。

ある方は、ご自分のできることで、お手伝いをしたい、と毛糸で帽子を編んだり、ケーキを焼いたりして送ってくださいます。大人の方は、休みが取れないので、これでと献金してくださいます。子どもたちも、５月の聖母月には自分で考えた節約をしてお金を貯めて届けてくださるケースもあります。

また、私は体が不自由なので、祈りしかできませんので、と積極的に祈ってくださっています。

本当に、こんなに多くの善意の方々に支えられて支援活動が続いています。すべて皆様のおかげです。ありがとうございます。教皇フランシスコが、よく「出向いて行く」必要性を訴えられていますが、これは、皆さまのしてくださっていることに当てはまります。

フランシスコ教皇が、11 月に日本に来てくださるというニュースが流れています。この教皇が、私たちになにを期待しておられるかを、よく聞き取って、実行していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

～～～

2018 年全ベース研修会議

仙台教区サポートセンター　　濱山　麻子

12 月 17 日～18 日、宮城県南三陸町のホテル観洋で、全ベース研修会議を行いました。全ベース会議は年に 3～4 回、仙台教区サポート会議と同日開催で、東日本大震災復興支援のためのカリタスベースの責任者が集い、情報共有と話し合いを行っています。2015 年から、そのうちの 1 回を、スタッフの学びと交流のため「研修会議」として行うようになりました。2017 年は福島の浜通りを見学し、今回は三陸沿岸の状況を学ぶ機会となりました。

会場となったホテル観洋は、国道 45 号線沿いの、太平洋を見下ろす海際にあります。2011 年 3 月 11 日、津波によって 2 階部分まで浸水しましたが、建物に大きな損傷はありませんでした。次々に避難してくる町の方々を女将自らが「誰も追い返してはいけない」と受け入れ、最大で 600 人の町民を守りました。「震災の記憶を風化させてはいけない」と、震災の翌年から、従業員が案内役となり、宿泊客を対象に「語り部バス」を毎日運行しています。研修の一つ目として、このバスに乗車しました。

かさ上げ工事により、一部しか見えなくなった旧防災対策庁舎（南三陸町）

私たちのバスの案内役を務めてくださったのは、伊藤俊さん。震災当日や被災前の写真を見せながら、震災直前に新しい体育館ができたばかりだった戸倉小学校、3 階まで浸水したものの集まっていたお年寄りが屋上に避難して全員助かった高野会館、職員が最後まで無線で住民に避難を呼びかけていた防災庁舎を回りました。伊藤さんは「命を守るのは行動です。次に災害が起こった時に、私は皆さんのそばで声掛けできるわけではありません。自分の命、大切な家族の命を守るための行動をしてください」と何度も力強く繰り返しました。

1 時間ほどで語り部バスはホテルへ戻り、続いてホテル内で会議を行いました。前半は、まず長崎教会管区における災害発生対応の取り組みについて、元大槌ベース長の片岡英知さんからお話をいただきました。長崎教会管区では、全国各地で頻発する災害を受けて、大槌ベース閉所後も支援体制を維持する必要があると認識されたことから、長崎教会管区災害支援室が設置されました。片岡さんは 2018 年 3 月に大槌ベースを閉所した後、それまでの経験を活かして災害支援室スタッフとして勤めておられます。

長崎教区　片岡さんの話を真剣に聞く参加者たち

東日本大震災以降、ボランティアへの意識が高まり、他県から被災地へのボランティアが多く訪れる中、長崎教会管区では、災害発生時に、対外的なボランティアへの対応やベース運営を管区で、教会や信徒への対応、ケアを地元の教区主体で行えるような体制づくりを行おうとしています。そのため、各教区内に災害サポートセンターを設け、災害発生時に動くことができる人材の確保、体制の確立をめざし、現在、東日本大震災被災地で開かれているボランティアベースで研修を考えているということでした。また、これまでの災害発生時に、情報が錯そうした経験から、各教区で連絡の担当者を決めておき、教区内においても、また対外的な面においても、正式な情報発信ができるように準備をしています。災害への備えは、平時にはイメージがしづらく、無駄なことのように感じがちですが、毎年のように各地で大きな災害が続いている中、これまでの経験を踏まえて支援体制を作っておくことの必要性が感じられました。

サンオーレ袖浜にて南三陸ベース特製モアイ像と

会議の後半は、第 35 回全ベース会議と第 48 回仙台教区サポート会議が別室で行われました。全ベース会議では、各ベースからの活動報告が行われました。岩手・宮城の津波被災地では、災害復興公営住宅がおおよそできあがり、ハード面での復興はかなり進んでいます。その中で、大船渡ベースでは、若い世代の住みやすさを目指して、子育て支援に力を入れていること、災害復興公営住宅では高齢者が多く、自治会主催のサロンが行われていないためにカリタスへの支援依頼が増えていること、南三陸ベースでは、災害復興公営住宅集会所で子どもの見守り活動や、ベースで栽培・収穫したササニシキを食べるイベントを行い、住民の交流をはかっていることが報告されました。さいたま教区といわき教会の協働による(仮)カリタスいわきは、聖母訪問会楢葉修道院のシスターの協力も得て、いわき市内の 2 か所の復興公営住宅集会所でサロン活動を行っています。そのうち 1 か所の復興住宅では、2 件の孤独死があり、原発事故から 7 年、仮設住宅での生活を経て新しい住環境に移り住んだ今、新たなコミュニティづくりが求められていることが改めて伝えられました。カリタス南相馬からは、司教団が 2021 年 3 月まで支援を表明しているが、それ以降も地域での活動ニーズがあると考えられることから、仙台教区、東京教区の承認を得て、2019 年 4 月 22 日に一般社団法人を立ち上げることが報告されました。

会議終了後、ホテルを出発し、南三陸ベースで以前から作成していたモアイ像が立ち並ぶサンオーレ袖浜に立ち寄り、新しい商店街や、災害ボランティアセンターがあったベイサイドアリーナの様子を見ながら、二つ目の研修先である、石巻市の大川小学校に向かいました。

大川小学校では、震災当日、地震発生から、津波が到達するまでに 1 時間近くあったにもかかわらず、子どもたちは 50 分間、校庭にとどまり、避難を始めたのは津波が襲ってくるわずか 1 分前でした。ようやく避難し始めたところに津波が押し寄せ、全校児童 108 人のうち 74 人と、教員 10 人が犠牲になりました。

パネルを使用して詳しく説明してくださった佐藤さん

ここで話をしてくださったのは「大川伝承の会」共同代表の佐藤敏郎さんです。当時５年生だった娘さんを亡くしています。佐藤さんは、子どもたちが校庭にとどまっていた 50 分間をイメージしながら、震災前の学校の様子から、生き残った子どもたちの証言や、調査の結果分かったことなどを詳しく伝えてくださり、体育館裏の山の斜面へ私たちを案内してくださいました。その山は震災前に、子どもたちがシイタケ栽培の体験学習をしていたところで、実際に上ってみると、斜面は校庭から見上げるよりもずっとなだらかで、低学年の子どもも苦労せずに上れただろうと思えました。途中に津波到達点の表示がしてあり、そこで佐藤さんは「ここから見える景色を覚えていてください。この景色が見えていれば、子どもたちは助かったはずなんです」とおっしゃいました。

写真左：旧大川小学校の裏山（津波到達点）から見た風景
写真右：実際に裏山の斜面へ足を運んだ参加者たち

自身も中学校の教員だった佐藤さんは「先生たちは子どもたちを守りたかったはずです。それなのにどうして子どもたちは死ななくてはいけなかったのか。子どもたちの命を、未来につなげていかなくてはいけない」と語りました。現場に立ち、お話を聞くことで、かつての小学校や地域の様子が目に浮かび、津波に奪われたものの重さが心に深く刺さってくるように感じました。お話の後、全員で慰霊碑の前で祈りをささげ、今回の研修会議は終了となりました。

二つの研修を挟み、大変慌ただしい行程ではありましたが、現地でお話をしてくださったお二人の生の言葉を通して「命を守ること」について考える機会になりました。これまで何度も訪ねたことがある場所であっても、体験した方々の言葉を聞くことで、景色が深く立体的に見えてくるように思います。間もなく震災から８年を迎えますが、改めて、現地を訪れることと伝えていくことの大切さを感じ、今後の活動のために、実りのある研修会議となりました。

お米プロジェクト

カリタス南三陸ベース　白石　吾子

それは草刈りから始まりました。

休耕田を使ってほしいという地元米川の要望と、仮設で暮らしていた時にお茶っこした皆さんに自分たちで作ったお米を食べて喜んで元気になってもらいたいとの思いから、南三陸ベース初の試み「米作り」がスタートしました。

こだわったのは品種と天日干し。

初めての稲刈り　収穫量の多さに地元のプロもビックリ！？

一昔前まで食べられていたササニシキは育てるのが難しい、冷害に弱いとのことで、今はほとんど作られていません。それでもお茶っこのおじいさん、おばあさんにとって懐かしいお米、懐かしい味に違いないからとササニシキを選び、お日様に当ててじっくり乾燥させる天日干しと決めました。休耕田からのササニシキ作りは誰もが初めてで色々なドキドキを胸に長靴を履く日々が始まりました。

積雪前の草刈り、畦の修復、水路の補修。春は代かき後に浮いてくる草や根の除去作業。田植え機で植え残しが出たところは腰をさすりながらの手植え。防虫剤散布、水の管理、田の草取り。素人で手探りの私たちでしたが、田んぼに足を運ぶごとに地域の方たちが声をかけてくださって顔見知りが増えていきました。ボランティアの皆さんも喜んで手伝ってくださいました。健やかな稲の成長に安堵し、開花に感激。秋には緑色の稲が黄金色に変わる様に見とれ、天気予報とにらめっこ。田んぼの水はけが悪く、畦を切り、毎日のように桶で水を汲み出しに行く日々でした。そして待ちに待った稲刈りと棒掛け。この頃には田んぼの先生が何人もいらして、勉強のため先生の田んぼの稲刈りを手伝わせていただいたり、農機具を貸してくださったりして本当に有難かったです。いよいよ脱穀。積み重なっていく米袋の山は、たくさんの温かい方々の協力があったからこそだと胸いっぱいになったことを覚えています。

写真
左上：復興住宅での新米収穫祭
右上：幼稚園おにぎりクッキング
左下：南三陸社協「結の里」内の
縁側カフェで新米イベント

実りに感謝し、私たちは新米イベントを開催していくことになります。収穫したササニシキのおにぎりと豚汁を用意して、南三陸町のお茶っこの皆さん、米川地区、児童施設、幼稚園などで行いました。「ササニシキはおいしいね」「本物のおにぎりの味がする」「懐かしい味だ」「天日干しでは上等品だね」など喜んでいただきました。ササニシキを作ったことや天日干しの労をねぎらってくださる方も多かったです。

開催した中で特に印象に残ったことが二つあります。一つは全員が 80 歳以上のおばあさんたちとのイベントです。震災から７年の歳月を経て、今では自分で歩くこともままならず、一日中家の中にいることが増えているそうです。新米イベントの日は皆さん一年ぶりの再会となりました。久しぶりの再会に話に花が咲き、とてもにぎやかでしたが、おにぎりと豚汁をお出しすると皆さん一同に静まりかえって食事を始めました。苦楽を共にした皆さんの心が今、一つになって、目の前にあることを慈しんでいるように感じ、特別な空気感に心が震えました。もう一つは幼稚園でのイベントです。お米を差し上げたところ、園児がおにぎり作りをすることになりました。素手でおにぎりを握ることはみんな初めてとあって思うようにできず、大きさも形も様々でしたが生き生き楽しんで握り、頬をふくらませてほおばるさまに、子どもたちが今を味わい尽くしていることがとてもまぶしく感じられました。

お米が繋いでいく縁がこんな風に広がっていくなんて、皆さんがこんなにも喜んでくださるなんて、収穫の頃にもまだ想像できませんでした。これからも心温まる時間を重ねていけますように。来年、休耕田をさらに二枚借りることにしました。草の香り、土の香りを胸いっぱいに吸い込んで、また草刈りから始まります。